



人になること (5) 榎本栄次

ルソーは「人は二度誕生する。一度目は存在するために、二度目は生きるために」と言った(エミール)。人は「人である」存在から「人になる」生きものである。イエスのたとえ話「放蕩息子」で反省して戻って来た息子のことを「死んでいたのに生き返った」と言って喜んだ父親の気持ちに表れている(ルカ 15:32)。人になることこそ新しい命の誕生である。この大転換をコペルニクスの転換という。これに出会うのが教育の場であろう。

Nをどうするか、学校の大きな課題になった。復学は難しい。それでも何とかしたいというクラス全員の嘆願を受けて、当日はN自身も参加して生徒総会が開かれた。

「N君が問題を起こして退学処分を受けそうだが、僕たちは彼に戻って来てほしい。彼が悪かったことは僕たちにも責任がある。これを機会の僕たちも変わろう。Nの復学を生徒総会で学校にお願いしよう」

Nが立って挨拶した。

「ありがとう。これから俺は変わりたい。カッとなった人当たっていたけど、これからは自分と戦う。それでも学校辞めさせられるかもしれない。でも、もう人を恨まない。自分のやったことだから仕方ない。でも学校に残りたい。俺は変わりたいです。よろしくお願いします。」

こう言って深く頭を下げた。

生徒会長が立った。

「このままNが帰ってきたら何も変わらない。本人も俺たちも本気で変わる覚悟がある。3つの提案をします。

1、学校から暴力をなくす。

2、禁酒禁煙を守る

3、授業をさぼらない。ベル席を守る(授業開始のベルが鳴ったらすぐに席に着く)

以上の「三ない運動」を全校で取り組むことを提案します」。

生徒会長の提案を満場一致で可決した。

この生徒総会を受けて職員会議が開かれた。講師である私は何もできず、ただ報告を聞くだけであった。民主的な学校だと思った。

「生徒に振り回されてはいけない」

「生徒総会なんて一時的な感情で無責任な決議だ」慎重な教師たちの雰囲気破ったのは担任のA教師であった。

「ご迷惑をかけてすみません。先生方にこれからもお世話賭けるっと思いますが、どうかもう一回だけチャンスをやってください。私はこのことに教師生命を懸けます」。

続いてM校長が言った。

「Mを復学させたら、また苦労が増すだろう。しかし私は彼を戻したい。これまでの彼は学校にとってマイナス100だったのがマイナス10になったから許そうとは思わない。私は彼が学校にとってプラス100になると思うから戻したい。教育は不思議な力を生むものだ」。

こうしてNは復学できた。しばらくしてのある日、授業に行くと隣の部屋から大きな怒鳴り声が聞こえてきた。

「うるせえ、お前の言うことなんか聞けるか」Nの怒鳴り声である。あちゃ、騙された！

しかしはっきりしていることは、この時からこの学校は大きく変わった。方向転換した。そしてNは卒業して、自衛官になった。人のために生きるのだそうだ。 おわり

11月も終わりの日の夕べ、京都市内の古い蔵を改造したライブハウスで、沢 知恵さんのコンサートが開かれた。土間に並んだ椅子に三々五々腰かけて待つうちに、真っ暗なステージに沢さんのシルエットが現れ、無伴奏で「久しく待ちにし、主よ、とく来たりて、み民のなわめを、解き放ちたまえ」の澄んだ声が響いた。なんと多くの問題が渦巻いている今なのだろう。「主よ、とく来たりて、お暗きこの世に、み光をたまえ」の言葉が心に染み入る。

主とはどんな人なのか。最初の福音書記者マルコは、その生誕について何も語らなかった。次いでイエスの生涯をまとめたマタイはその生誕についても記したが、彼は、それを、天使のマリヤへのお告げのような優しい物語から始めなかった。

マタイがイエス伝を書こうとした時、イエスはすでに、反逆者として捕えられ、十字架の上で無残な死を遂げていた。復活の証人として集まった少数の信徒からなるエルサレムの集会は、紀元66～70年のユダヤ戦争に巻き込まれ壊滅的打撃を受けていた。そんな希望の見えない時に、マタイはイエス伝を書いた。

彼は、イエス生誕の次第を、イスラエルの始祖アブラハムから始めた。アブラハムは、その子孫を空の星のように祝福するとの約束を神から受けた。彼は、約束のものを受けていなかったが、その約束を信じて生きた。彼の後を継いだ人々は紆余曲折を経て、かろうじてその祝福をダビデにまで引き継がせた。しかしその末裔は、不信を繰り返し、ついに約束の地をバビロンに明け渡すまでになり、神の祝福はそこで終わったか

に見えた。それにも拘わらず、神はこの民を担い通し、その末からイエスを生まれさせた。

当時イスラエルは、ローマ帝国の占領下であり、人々は望みなく、ただ宗教的儀式と戒律を墨守することに汲々としていた。そんな中でイエスは、掟を越えて小さく貧しくされた人に寄り添い、その問題を共に担われた。それが彼を十字架へ追いやることになってしまった。マタイは、このイエスの姿の中に、民に寄り添って歩み通される憐れみの神の姿を見た。この方こそやがて救いの約束を成就される方であると信じた。

クリスマスを前にアメリカのトランプ大統領は、エルサレムを一方向的にイスラエルの首都であると宣言した。途端に抗議のロケット弾がエルサレムに撃ち込まれ、イスラエルの報復の空爆がパレスチナ自治区に加えられた。主よ、とく来たりて、との思いが切なるものになる。

沢さんがコンサートの終わり近くに歌った、ボブ・ディランのBlowin' in the Windが心に響く。

どれだけ人が死んだら

あまりにも多くの人が死んでしまっていることに気づくのだろう

その答えは友よ、風に吹かれている

その答えは、風の中に舞っている。

投稿 きらら俳句

- 小雪舞い白い小雪の米子道 小久保枯骨
- 猪参上校舎の階段駆け上がる 榎本虚舟
- 苔庭の落ち葉もたげて霜柱 松本茶香
- 背を丸め行き交う人や冬木立 佐々木公女
- 零余子飯二人で祝う誕生日 原 岳

関西セミナーハウスの四季だより

冬 萌え

関西セミナーハウス庭園担当 神 廣光

北風に揺れる小枝の向こう、西の方角を眺めると淡いコバルトブルーと鮮やかなオレンジ色の薄暮の空に北山の稜線がくっきりと浮かび上がり、ちょっとしたパノラマを見ているようです。きらら山荘は比叡山の裾野に位置するため北部郊外が一望できます。秋から初冬にかけ快晴に恵まれると、こういった光景に出会うことがあります。でも、冷え込んだ早朝の修学院集落は、平地と温度差があるようで、棚田は霜で一面真っ白に覆われ顔を刺すような痛さに襲われます。この寒さの中でも活発に営みを続けている生き物たちがいます。日が登る前、ピーンと張った冷氣と静寂に包まれた曼殊院の竹やぶに足音を忍ばせ息を殺してそーっと近づきます。運がよければいるはずです。いた！ 楠の大木の根元に。一等の日本リスです毎朝近くで、榿やくぬぎの実などをあさっているようです。ダークグレイのふわふわの冬毛に覆われ、尾っぽもふさふさです。まるで上等のコートをまとっているかのようです。リスはとても敏捷なので人の気配を感じるといち早く身を翻して竹やぶの中に姿を消します。敏捷さはリスが弱者ゆえに天敵から身を守り抜くためのすななのでしょう。猫の赤ちゃんほどでしょうか。